

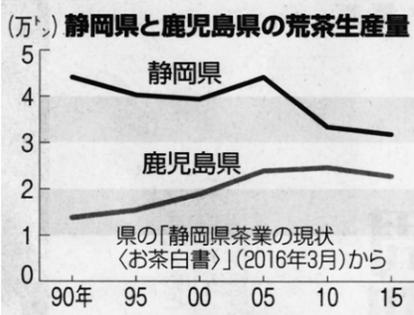
お茶は成長産業



左から新工場建設中の向島和詞さん、加奈子さん夫妻と、「地元企業のために最大限協力している」と話す山田組（藤枝市）の現場監督の落司頭大さん＝藤枝市瀬戸ノ谷

有機栽培で海外に活路

南北118キロ、東西155キロに及ぶ県域。日本一高い富士山があれば、日本最深の湾の駿河湾もある。土地の変化に恵まれた静岡は海や山の幸の「宝庫」だ。昨年、環太平洋経済連携協定（TPP）の承認案が国会で可決され、海外産との競争などが激化するかもしれない。だが、そんな状況に負けない価値のある食材を生み出そうと、奮闘している生産者たちがいる。



静岡と言えは、お茶。だが、鹿児島産などに押され、静岡茶を取り巻く環境は厳しさを増している。中小規模の茶農家や茶商は淘汰され、てしまふのか。いやいや、どこか「山のお茶」に活路を見いだす人々がいる。

藤枝市の中心市街地から北へ約10キロ。同市瀬戸ノ谷の緑豊かな谷あいでは、茶工場の建設が進む。新茶の季節に稼働する「葉っぱい向島園」の新しい茶工場。3月に完成予定だ。

有機栽培茶の製造販売を手がける向島園。従来の工場では煎茶しか製造できなかったが、今回は抹茶の原料となる碾茶の製茶機も入れる。園主

の向島和詞さん(31)は父親の急死後、18歳で農業や化学肥料を使わない農法を受け継ぎ、完全有機栽培に活路を見いだしてやってきた。

近年、海外向けを中心にした有機栽培茶や碾茶の需要は高い。一方で、県内の荒茶工場数は2千の大半を割ったとみられ、製茶大手や既存の茶商の工場設備の更新を除けば、新たに茶工場を建設する動きはまれ。製茶機械を搬入するカワサキ機工(掛川市)の担当者も「近年ない」と驚く。

「攻め」の姿勢に見えるが、向島さん自身、「必ずしも自社の利益にはならない。新工場の建設を迷った時期もある」と明かす。それでも、「茶農家に有機栽培を広めて海外に届ける形で、ともに生き残ってほしい」と決断。国の交付金や県、JAの支援を受けつつ、約10戸の茶農家の有機栽培を指導し、県中部の茶商経由で米国向けに輸出する予定だ。

有機栽培への転換は数年がかり。向島さんは「残留農薬の年が始まろうとしている。や近隣からの農薬の飛散などへの対応は難しい」と言い、茶農家を集めた勉強会で独自のノウハウを伝えようとしている。

新工場が稼働すれば、向島園の従業員は向島さん夫妻を含めて、3人増の計7人になる。脱サラした30代前半の同級生が中心だ。向島さんは「安定した仕事を辞めてでも向島園で働きたい」と声をかけてきてくれた大事な仲間」と話す。30代による挑戦と飛躍の年が始まろうとしている。